調査報告

沢井トメノさんが語る ツッポククシペッ ”cuppokkuspet”

沢　井　春　美

目次　1．解題
　　2．あらすじ
　　3．『ツッポククシペッ』
　　4．あとがき

1．解題

ここに紹介するのは、十勝・本別町に在住の沢井トメノ・フチ（フチ＝おばあさん）が語る、「あさひかわにある小さな川」にまつわるお話で、1994年9月23日にフチの御自宅にて筆者が録音したものです。

1906年生まれのフチが、今からおよそ80年程前（1915､6年頃）に母の清川ネウサルモン（1871?～1966）から伝えられたお話の中の一つで、フチは当時まだ幼く10才位でしたが、何故かこのお話がどうしても忘れられずに、長い間頭から離れなかったというのです。

フチが初めて「あさひかわ」を訪れたのはそれから数十年後、子育ても家庭も落ち着いた頃でした。この時、旭川の優れたアイヌ文化伝承者で、フチと親好のあった杉村キナラブックさんに、気になっていたこのお話に出てくる川のことを聞いてみたのです。

「ツッポククシペッ っていう川、ここにあるのですか?」というフチの問いに対して、キナラブックさんの答えは「ありますよ。その川はありますよ。」[(1)] というものでした。

キナラブックさんのその返答によって、長い間不思議に思い、頭から離れることのなかったこのお話が、フチにとってようやく納得のいくものとなりました。

十勝・本別のチエトイ・コタンに住んでいた母から、子供のときに聞いた「あさひかわ」の話を、数十年経って旭川の知人から「その川は本当にある」ことを確認し、それから更に数十年後の1994年、長い時を経てこのお話が始めてフチの口から語られることになりました。

後に、『テエタ　オカイ　ウタㇲ　teeta okay utar （昔の人たち）は、男の人らがね、イラマンテ　iramante （狩り）するのに、近道あっちこっち歩いて カシコッ kaskot （仮小屋・狩小

屋）作ってそこに泊るしょう？　どこそこから来る人ら食べ物ないと困るっていって、余った食べ物をネズミの届かないようにつるして、必ず後から来る人に食べ物残すんだと、自分が帰る時。そういうふうにして、お互い助け合うから、ウエネウサㇲ u'eneusar （お話）の中にこういうものが出てくるということ。』と、説明をしながら、旭川と十勝は遠いようだけれども昔から通じていたという事、これは旭川と十勝の歴史になることであると強調し、忘れてはいけないと念を押されました。

それから、「あさひかわ」の話をする度に思い出すという、今は亡き杉村キナラブックさんや砂沢クラさんとの思い出を何度も何度も感慨深げに話されるのでした。

凡例

アイヌ語の表記法は『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』（北海道教育委員会）に従いました。

この「あさひかわ」の昔話は、これまでに数回短い要点を話されたのを除いて、こうして話の全容を語ることは、おそらくは今回が始めてです。日を改めて筆者の質問に答えていただくうちに、その当時の雰囲気や語りの中での細部を思い出されることが度々ありました。そのため、後にフチ自らが語り加えた部分は下線で表し、言い違いであると指摘された部分や話の内容がそぐわない部分は[　　]に入れました。

本文からの訳だけでは説明しきれない語やフチ自身の解説は（註）に書き入れました。

尚、聞き手である筆者に要点を知らせるために、語りの途中で時々日本語での解説があり、その部分はフチの言われた通りの言葉で表しました。

2．あらすじ

現在「旭川」と呼ばれている場所は古くはアイヌ語の別の地名を持っていましたが、和人が入って来るようになって以来そこは「旭川」という名が付きそれが広まって、元からのアイヌ語の名前は忘れられてしまいました。

昔々、神様はその「あさひかわのある山」に悪い神を降ろしました。その悪い神は、降ろされた以外の場所にはどこへも行くことが出来ないという事を言い付けられました。しかし、悪い神だからなかなか食べ物もあたらない上に、降ろされたその山はとても険しく、木やぶどうづるが繁っているにもかかわらず、食べ物がどうしても足りません。自分自身を養うために悪い神は、声がとても良いので歌をうたいながら自分の肉をかじってちぎってはほうり投げながら、山を登っていくのです。それはとても不思議な光景で、噂を聞いた人間たちはその様子を見るために山へとやって来て、近くに行って見ようとするのです。悪い神は、自分が降ろされた山のことは何でも知っています。人間に見られないように、その人間たちが近くに来やすいように適当な隠れ場所や木・つるの陰に隠れて、人間を引き寄せては食べて空腹を満たすというのです。しかし、いつも人間を食べることができるわけではないので、作戦に失敗した時には、自分のちぎった肉

を拾って食べながら山を降りるのです。その険しい山の麓には、”ツッポックシペッ”という名の小川が流れていて、お腹がいっぱいになった悪い神は、その川で水を飲んで一息つき、疲れた体をしばらく休ませるというのです。

悪い神が人間を殺しては食べるという噂がだんだんその村全体に広がり、さらにはオタスッウンクル の耳にも入り、悪い神の行動は一時的な事だろうと思うのですが、いつまでも悪い噂が続いているので、じっくりと考えたあと、実際に山へ行ってその様子を見て作戦を立てました。最後には、悪い神をすっかり滅ぼしたのです。

『今では、その「旭川」という所は恐ろしい悪い神もいなくなり、人々は静かに生活出来るような良い村になったのです。』とオタスッウンクルが語りました。

3.『ツッポックシペッ』

”Cuppokkuspet”

始めに少し練習してみるから・・・・・[2]

アノカイ アナク トカチ オッタ	
anokay anak TOKACI[3] ot ta	私は十勝という所に
オカイ アン ワ	
okay=an wa	暮らして居りまして
ピシカネ ワ	
piskane wa	まわりから
イヌアン コロ	
inu=an kor	私が聞くところによりますと
テエタ アナクネ アサヒカワ アリ	
teeta anakne ASAHIKAWA ari	昔々は「あさひかわ」という
レアン コタン イサム	
rean kotan isam.[4]	名のある村はありませんでした。
コロカイ	
korkay	しかしながら
ネコン レアン レ ネ ル ネ ヤ	
nekon rean re ne ru ne ya	（その村の昔の名は）何という名であったのか
アコランベテク	
a=koranpetek.	（今となっては）わからないのです。

「あさひかわ」はシャモの言葉だから、

アイヌ　レヘ　アネラムㇲカレ
aynu rehe an=eramuskare.　　アイヌ語の名は、聞いたことがありません。

コルチ[5]は知っていたんだから、

もっと教えてくれればいかったな、

私がいいかげんになってから

「あさひかわ」しか知らないもの。

コㇺカイ　アサヒカワ
korkay ASAHIKAWA　　けれども「あさひかわ」
アリ　アン　コタン
ari an kotan　　という村には
シノ　ヌプリ
sino nupuri [yupke]　　ほんとうにでっかい山が
ルㇷ゚ネ　ヌプリ　ロㇱキ　ワ
rupne nupuri roski wa　　高い山がそびえ立って
アン　ル　ネ
an ru ne.　　いるのです。

（本文）

テエタ　ウチャㇱコマ　アナㇰネ
teeta ucaskoma anakne　　昔からの言い伝えによりますと
アサヒカワ　アリ　レアン　コタン
ASAHIKAWA ari rean kotan　　現在の「旭川」という名のある村は
シンナイ　コタン
sinnay kotan,　　以前は別の（名前のついた）村、
シンナイ　モシリ
sinnay mosiri　　別の（名前のついた）場所

アコランケ コタン a=koranke kotan	に降ろされた村
ネ ナンコロ ne nankor.[6]	であったかもしれないのです。
テク タネ アナクネ tek tane anakne	そして今はもう
シリチャナ ヒンネ sir can[7] a hinne	時代がやさしくなって
テエタ アサヒカワ teeta ASAHIKAWA	昔の「あさひかわ」
アリ アン コタン ari an kotan	という村
アイヌ コタン aynu kotan,[8]	アイヌの村の、
コタン レ アオイラ kotan re a=oyra.	その名は忘れられてしまいました。
ネコン レアン コタン nekon rean kotan	何という名のある村で
ネ ア ル ネ ヤ ne a ru ne ya	あったのか
アコランベテク a=koranpetek	今では、もうわからないのです。
コロカイ korkay	といいますのは
タネ シサム ウアッテ tane sisam u'atte	今は和人が大勢
カスパ テク kaspa tek	住んで居りますので
タネ アナク アサヒカワ アリ tane anak ASAHIKAWA ari	現在は「旭川」という（日本語の）
レアン コタン ネ ル ネ rean kotan ne ru ne.	名を持つ村になっているのです。
コロカイ korkay	けれども

ネアン　コタン　アナㇰネ
nean kotan anakne　　その村というのは
ヌプリ　ユㇷゲ　ワ
nupuri yupke wa　　山が険しいので
ヌプリ　ユㇷゲ　ワ
nupuri yupke wa　　山が険しいというので
メノコ
menoko　　女性、
エカッタㇲ　アナㇰネ
ekattar anakne　　子供達は
オロタ　パエ　カイ　エアイカㇷ
oro ta paye kay eaykap　　そこに行くことも出来ないのです
ヒタ　チャウェトㇰウタㇲ
hi ta cawetok utar[9]　　それで真にりっぱな方々
タㇷ　タ　クス
tap ta kusu　　その方々
タㇷ　タ　クス
tap ta kusu　　その方々こその、
ケゥツム　ユㇷゲ
kewtumu yupke　　心が強く
チャウェトㇰ　ウタㇲ
cawetok utar　　りっぱな人々の
ケライポ　コタン　シッカマ
keraypo kotan sikkama　　おかげで荒々しい村が守られる
コタン　シッカマ　ワ
kotan sikkama wa　　村が守られるのです
カムイ　オロワノ　アコランケ
[nekon,,]kamuy oro wano a=koranke　　神様の所から降ろされた
アサヒカワ　コタン　ネ　ワ
ASAHIKAWA kotan ne wa　　「あさひかわ」村であるので
ヌプリ　ユㇷゲ　ワ
nupuri yupke wa　　山が険しく
ネコン　アン　クス
nekon an kusu　　一体どうして（神様は）このように

アンペ ネ ヤ	
an pe ne ya	（険しい山を）作ったのだろうか[10]
アイヌ アナㇰ エラムㇲカレ	
aynu anak eramuskare	人間にはわからないのです
カムイ エラマン ナンコㇺ	
kamuy eraman nankor	神々はもちろんわかっているだろう
コㇺカイ	
korkay	けれども
アイヌ エラムㇲカレ	
aynu eramuskare.	人間にその理由はわからないのです。
ヒタ	
hi ta	それで
ネアン アサヒカワ コタン	
nean ASAHIKAWA kotan	その「あさひかわ」村に
オッタ シノ ヌプリ アン ワ	
ot ta sino nupuri an wa	大きい山がありました
シラナヒンネ	
sir an a hinne	ところ
イヌ アンコㇺ	
inu=an kor	私が聞くところでは
ネコン ネ ハㇱ ネ ヤ	
nekon ne haw ne ya	一体どうしたわけだろうか
オロワ ツッポㇰクㇱペッ	
oro wa ”cuppokkuspet”[11]	”ツッポㇰクㇱペッ ”
アリ レアン ペッ	
ari rean pet	という名のついた川
ポン ペッ	
pon pet	小さい川が
ポロ ヌプリ チョㇺポㇰ ペカ	
poro nupuri corpok peka	大きい山の下に
ツッポㇰクㇱペッ アリ レアン	
”cuppokkuspet” ari rean	”ツッポㇰクㇱペッ ”という名の
ペッ モㇺ ル ネ	
pet mom ru ne.	川が流れているというのです。

ワ　ネアン　ツッポククシペッ
wa nean "cuppokkuspet"　その "ツッポククシペッ "と
アリ　レアン　ヌプリ
ari rean nupuri[12]　いう（川が麓に流れる）その山は
ソンノ　ヌプリ　ネ　イケ
sonno nupuri ne ike　誠に大きな山で
シラナヒンネ
sir an a hinne　ありまして
ワ　ネアン　ヌプリ　アナク
wa nean nupuri anak　その山というのは
ウェンカムイ　アコランケ
wen kamuy[13] a=koranke　悪い神が降ろされた
コタン　ネ
kotan ne.　村であるというのです。
ウェンカムイ　アコランケ
wen kamuy a=koranke　悪い神が降ろされた
コタン　ネ　ワ
kotan ne wa　村であるので
シリホントム　ワノ
sir hontom wano　あるとき
イヌ　アン　コロ
inu=an kor　私が話を聞いたところでは
ネコン　ネ　ハウ　ネ　ヤ
nekon ne haw ne ya　どうした訳なのであろうか
ハウェ　ピリカ
hawe pirka,　すばらしい声
ネプ　エネ　アウキ　ネ　ヤ
nep ene awki ne ya[14]　何者がそのような声を出すのであろうか
アコランペテク
a=koranpetek　わからない
ハウェ　ピリカ
hawe pirka　美しい声で
ウポポ　カン　エメス　カン
upopo kan emesu kan　（その者は）歌をうたいながら、山を登りながら、

カミ リシパ ワ オスルパ
kami[15] rispa[16] wa osurpa　自分の肉をちぎっては投げ
カミ リシパ ワ
kami rispa wa　自分の肉をちぎっては
オスルパ カン
osurpa kan　投げながら
イキ カン ウポポ カン
iki kan upopo kan　繰り返しながら歌をうたいながら
ヌプリ エメス ア ヒンネ
nupuri emesu a hinne　山を登り続けるというのです
オロワ ラン コロ
oro wa ran [haw] kor　そうして山から降りるときには
ハウェ イサム
hawe isam.　その声は聞こえないというのです。
ワ カミ リシパ ワ
wa kami rispa wa　肉をちぎって、
カム イキア カム
kam ikia kam　肉、その肉を
エ カン ラン ル ネ
e kan ran ru ne.[17]　食べながら山を降りるのです

自分の肉をちぎっては投げ、ちぎって投げ、
噛んでだよ、噛んで投げ、噛んで投げ、

ウポポ カン エメス ア ヒンネ
[ek e]upopo kan emesu a hinne　歌をうたいながら、山を登って
ヌプリ パ タ オマン コロ
nupuri pa ta oman kor　山の頂上まで行くと
オロワ ウポポ ソモキノ
oro wa upopo somo ki no　今度は歌はうたわずに
ラン ワ
ran wa　山を降り
イキアプ エウマレ ワ
ikia p eumare wa　その肉を拾い集めて

エ カン ラン
e kan ran.　　食べながら山を降りるのです

そうしなかったら命もたんかったんだべ、

ウェンカムイ
wen kamuy だもの　　悪い神だもの
ネアン ペ エ オケレ コロ
nean pe e okere kor　　その悪い神は肉を食べ終えて
ツッポックスペッ タ
cuppokkuspet ta　　ツッポックスペッに
ラパンテク ワッカ ク
rap an tek wakka ku　　降りて水を飲むと
テク ヤイシオロ アン
tek yaysioro an[18]　　ほっと一安心するというのです
カン イキ カン アン
kan iki kan an　　そうしながら居る
アリ アン オルスペ アン
ari an oruspe an.　　という噂話があるのです。
ア コロカイ
”a korkay　　「そうではあるけれども
イルカイ イルカイ イルカイ
irukay irukay irukay[19]　　（そのような状態は）長続きは
ネ ナンコンネ
[es]ne nankor ne　　しないだろうから
アリ ヤイヌ アン カン
ari yaynu=an kan　　と気にもしないで
オカイ アン ア ル ネ
okay=an a ru ne”　　私は暮らしているのです」
アリ オタスッウンクル アウキ
ari otasut’unkur awki　　とオタスッウンクルが言いました
オタスッウンクル
otasut’unkur　　オタスッウンクル（が言ったのです）
オロワ ネアン ペ ネプコン
oro wa nean pe nepkon　　その者のように

エイコシテク ハウェ ピリカ クス
eykostek hawe pirka kusu　　あまりにも声がすばらしいので
アイヌ ウエカルパ ワ
aynu uekarpa wa　　人々が集まって
ネコン アン ペ タプ
"nekon an pe tap　　「一体何者が
イッシリクラン
issirkuran,[20]　　驚くばかりの
ハウェ ピリカ アワナ
hawe pirka aw an a.　　きれいな声であるのか。
ネコン アン カムイ
nekon an kamuy[21]　　どのような神が
カムイ
kamuy としか思わんわな、　　神様としか思わないわな、
ウェンカムイ
wen kamuy だけど、　　悪い神だけど、
ネコン アン カムイ タプ
nakon an kamuy tap　　一体全体何者が
イッシリクラン
issirkuran　　それほどの
ハウェ ピリカ ワ アウキ ヤ
hawe pirka wa awki ya"　　美しい声を出すのだろうか」
アリ ヤイヌ アン クス
ari yaynu=an kusu　　と、考えて

[a yaynu utar ue,,,]
パエ カイ コロ
paye kay kor　　そこへ行ってみるのです
ネアン ヌプリ オレン
nean nupuri or en　　その山に
オマン コロ
oman kor　　行ってみると
イシリクラン ニ ウサ
isirkuran ni usa　　驚いたことに木々が

ポロンノ ニ ロシキ ワ
poronno ni roski wa　　たくさんの木々が立ちならび
ハップンカラ
hat punkar　　ぶどうづるや
アルサ ニ プンカラ
arusa ni punkar　　いろいろな木のつるが
エイコシテク イロンネ ワ
eykostek ironne wa　　あまりにも厚くて
ネアン アウキプ
nean awki p　　その声を出すものを
アヌカン ルスイ ヤッカイ
a=nukar rusuy yakkay　　見てみたいけれども
アエシタン カ エアイカプクス
a=estan ka eaykap kusu　　捜すことが出来ないので
ナ エハンケノ
na ehankeno　　もっと近くに
ナ エハンケノ
na ehankeno　　もう少し側に
アリ フムアシ クス
ari hum'as kusu　　と思って
オマナナ ヒンネ
omanan a hinne　　近づいて行って
ネアン ベ ヌカラ コロ
nean pe nukar kor　　その人が見ると
ウェンカムイ ナニ
wen kamuy nani　　悪い神はすぐさま
ネアン アイヌ ロンノ ワ エ
nean aynu ronno wa e　　その人間を殺して食べて
カンナ スイ エメス
kanna suy emesu　　そして再び山を登るのです
ウポポ カン エメス ワ
upopo kan emesu wa　　歌をうたいながら山を登って
カミヒ リシパ ワ
kamihi rispa wa　　自分の肉を噛みちぎって

エヤプキリ カン エメス

eyapkir kan emesu	投げながら山を登るのでした。
ヒタ	
hi ta	そうして
ネアン ウェンカムイ アナクネ	
nean wen kamuy anakne	その悪い神は
ネンカイ エク シリ エラマン ワ	
nen kay ek sir eraman wa[22]	誰かやって来ることをわかって
エラマン ワ	
eram'an wa	わかっているので
ネコン イキ チク	
nekon iki cik	どのようにすれば
ネアン アリキ ウタラ	
nean arki utar	近づいて来た人間を
エ エアスカイ	
e easkay	食べることが出来るのか
ロンノ ワ エ エアスカイ ヤ	
ronno wa e easkay ya	殺して食べることができるだろうか
アリ ヤイコペペケレ カン	
ari yaykopepeker kan	と、考えながら
ウポポ カン	
upopo kan	歌をうたいながら
エメス	
emesu.	山を登るのです。
ラン カン	
ran [kor] kan	山から降りながら
カミヒ	
kamihi	自分の肉を

[rispa wa eyapkir a p][23]

エウマレ ワ

eumare wa	拾い集めては
エ カン ラン	
e kan ran	肉を食べながら山を登りる

カン　イキ　ア　ヒンネ
kan iki a hinne　　そうして暮らしているという
シリホントム　ワノ
sir hontom wano　　その途中から
ネアン　カムイ　オルスペ
nean kamuy oruspe　　その神の噂話を
エネ　アニヒ　ワ
ene an ihi[24] wa　　耳にしましたところ
ネンカイ　エク　コロ　エ
nen kay ek kor e　　誰か来たら食べるということなのです

誰か来たら食べるの。[pirkan isir,,]

もう、そこに住みついたら何でもわかるわな。

エイコシテク　ウポポ　ピリカ　クス
[nean,]eykostek upopo pirka kusu　　あまりにも歌がうまいので
ヌ　ルスイ　クル　アリキ　ウタラ
nu rusuy kur arki utar[25]　　聞きたい人やって来る人々を
ナニ　エ　カン
nani e kan　　すぐさま食べて
イキ　カン　アン
iki kan an　　そうして暮らしている
ウェンカムイ　アン　ル　ネ　アリ
wen kamuy an ru ne ari　　悪い神がいるのであると
タネ　ツパ　カ　レパ　カ
tane tu pa ka re pa ka　　今や、2年も3年も
チャワスル　アン　ワ
cawasur an wa[26]　　遠く（あさひかわ）から噂がありまして
オタスッウンクル　ヌ　ル　ネ
otasut'unkur nu ru ne　　それをオタスッウンクル が耳にしたのです
ヒ　タ　イッシリクランデレ
hi ta issirkurantere　　一体全体
ネプ　カメアシケ　タプ
nep kameaske[27] tap　　どんな悪い者が

アウキ テク
awki tek　　そのように声を出して
アイヌ ロンノ アワナ
aynu ronno aw an a　　人間を殺すのであろう
アイヌ ロンノ ハワナ
aynu ronno haw an a　　人間を殺すのであろうか
アイヌ エ アワナ
aynu e aw an a[28]　　人間を食べるのであろうか
アリ オタスッウンクル
ari otasut’unkur　　と、オタスッウンクル が
ヤイヌ カン ヤイシコペペケレ カン
yaynu kan yaysikopepeker kan　　考えて、更に考えて
ネコン シリキ チク
[ene]nekon sirki cik　　どのようにしたならば
ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy　　その悪い神を
アノチシテ エアスカイ ナ
an=ociste easkay na　　滅ぼすことができるであろう
アリ ヤイヌ クス
ari yaynu kusu　　と思い
ヤイコペペケレ アヒンネ
yaykopepeker a hinne　　考えながら判断しているうちに
タネ ツパ カ レパ カ
tane tu pa ka re pa ka　　今や、2年も3年も
イネパカ シラン
ine pa ka sir an.　　4年までも経ってしまいました。
アクス ソンノ ネプコン
a kusu sonno nepkon　　そうしたところが実際に
アイヌ ポロンノ ア エ オルスペ
aynu poronno a=e oruspe　　人間がたくさん食べられたという話を

[a=nu]
オタスッウンクル ヌ クス
otasut’unkur nu kusu　　オタスッウンクル が耳にしたので

アリ　アナマ　チカナ゚ネ
ari an=ama cik anakne　　このまま私が（何もせずに）放っておけば
コタン　ウェンテ　ナンコン　ナ
kotan wente nankor na　　村が荒らされてしまうだろう
アリ　ヤイヌ　クス
ari yaynu kusu　　と思ったので
ヤイコペペケ゚レ　アヒンネ
yaykopepeker a hinne　　じっと考え続けて
オロワ
oro wa　　それから

オタスッウンク゚ル
otasut'unkur だわ!
オタスッウンク゚ル
otasut'unkur 誰でも助けるんだ。

オタスッウンク゚ル
otasut'unkur　　オタスッウンク゚ルは
イキア　ヌプリ　オレン　オマン
ikia nupuri or en oman　　その山へ行ったのでした
ツパ　レパ　シラン　テ゚ク　な
tu pa re pa sir an tek NA　　2年3年経って、な?
オマン　テ゚ク
oman tek　　行ってみますと
ネコン　アン　カメアシケ　タプ
"nekon an kameaske tap　　「どのような悪い者が
ネプ　カメアシケ　タプ
nep kameaske tap　　一体何者が
アイヌ　ロンノ　ワ
aynu ronno wa　　人間を殺しては
アイヌ　エ　アワナ
aynu e aw an a"　　食べるというのだ」
アリ　ヤイヌ　クス
ari yaynu kusu　　と、思ったので

トーツイマノ シルアンパレ カン
to tuymano siruanpare kan[29] ずっと離れて考えながら
オマナナ ヒンネ
omanan a hinne 歩き回り
シルアンパレ
siruanpare そこで、じっくりと調べて
ツパ カイ
tu pa kay 2年もの間

2年だ。

ツパ カイ
tu pa kay 2年もの間
シルアンパレ ア ヒンネ
siruanpare a hinne 調べに調べ続けて
ネコン シリキ テク
nekon sirki tek どのようにしたならば
ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy その悪い神を
アノチシテ ナンコロ
an=ociste[30] nankor 滅ぼせるだろう

オタスッウンクル
今度 otasut'unkur は、 今度オタスッウンクルは

ウェンカムイ オチシテ
その wen kamuy ociste する その悪い神を滅ぼす

段取りに入っているわけ。

ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy その悪い神は
ネコン アカル チク
nekon a=kar cik 一体どのようにしたら

アノチシテ テク
an=ociste tek　　滅ぼして
アイヌ カシケ アノイキ
aynu kaske an=oiki　　人間を助ける
エアスカイ ナンコロ
easkay nankor　　ことができる
ハウタバナ
haw tap an a　　というのだろうか
アリ ヤイヌ クス
ari yaynu kusu　　と思い
シルアンバレ クス
siruanpare kusu　　再びよく調べてみるために
シネパ ツパ カ
sine pa tu pa ka　　1年、2年も
オマナナ ヒンネ
omanan a hinne　　山を行き来して
インカラ ヒンネ
inkar a hinne　　その目で実際に様子を見て
エネ アン ウェンカムイ
ene an wen kamuy　　そのような悪い神を
アノチシテ クニ
an=ociste kun i　　滅ぼす方法を
エラマン テク
eram'an tek　　見つけて
オタスッウンクル
otasut'unkur　　オタスッウンクル は
シルアンバレ
siruanpare　　時をかけてゆっくり調べて
エレバ ネ クニタ
ere pa ne kun i ta[31]　　3年目というとき
エレバ ネ クニタ
ere pa ne kun i ta　　3年目というときに
ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy　　その悪い神の

イオッタ オロタ シニヒ
i'otta oro ta sinihi　一番の休み場所
ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy　その悪い神の
イオッタ オロタ シニヒ
i'otta oro ta sinihi　休み場所
オレン
or en　その場所で
オタスッウンクル ネコン ポカイ
otasut'unkur nekon pokay　オタスッウンクル は何とかして
ネアン ウェンカムイ
nean wen kamuy　その悪い神を

[koyki tek nean wen kamuy ronno ru ne.][32]
カツ アカル ワ
katu a=kar wa　だまして
カツ アカラ ヒンネ
katu a=kar a hinne　だまし続ける作戦をとり
ネアン カツ アカリヒ
nean katu a=kari hi　だまされていることを
エラムスカレ
eramuskare　わからないで
エラムスカレ テク
eramuskare tek　作戦に気がついていないので
スルク ウス アイ アリ
suruku us ay ari　（オタスッウンクルは）毒矢でもって
アアンノ チョッチャ
aanno cotca　悪神を完全に射貫き
アアンノ アノチシテ ルネ
aanno an=ociste ru ne[33]　徹底的に滅ぼしたのです。
オロワノ
oro wano[34]　それからというもの
イキア アサヒカワ
ikia ASAHIKAWA って言ったんだべか、　あさひかわ、って言ったんだべか

アイヌ レヘ aynu rehe 知らないんだ, , rehe	アイヌ語の名前知らないんだ、
ネアン コタン nean kotan	（アイヌ語で旭川を指す）その村は
ウェンカムイ アノチシテ テク wen kamuy an=ociste tek	悪い神が滅ぼされて
オロワノ イキア コタン oro wano ikia kotan	それからというものその村は
ヤイラッチカノ ウレシパ yayratcikano urespa	（もう恐ろしい者もいなくなって）その村は静かになり
ピリーカ ウレシパ pirka urespa	落ち着いて生活が出来る
ピリカ ヤヤスラシテ コタン pirka yayasuraste kotan	名高い村に
ネ ア ル ネ ne a ru ne[35]	なったのです
アリ オタスッウンクル ari otasut'unkur[36]	と、オタスッウンクル
ヤエユカラアワン yayeyukar aw an.	が語りました。

4．あとがき

フチは80年も前の記憶をたどりながらこの話を語りました。語り終えて、さらに何度も説明をしながら、あるいは数々の質問に答えながら、話をくり返すうちに話の細部を思い出すこともあり、表現がより具体的になった部分もあります。昔話のおもしろさと共にその背景・歴史などもとても興味深く、ここに「あさひかわの小さな川」にまつわる話を紹介することができました。

フチが語り加えた箇所で、今回記載できなった部分について再度まとめる機会を待ちたいと思います。

フチが伝承するものには、ツイタク tuytak とウチャシコマ ucaskoma があり、このお話については『ウチャシコマ ネ ヤ ツイタク ネ ヤ アコランベテク。ucaskoma ne ya tuytak ne ya a =koranpetek.（ウチャシコマか、ツイタクだかわからない。）』『現代の人間が言っているんだから、そりゃ、アコランベテク a=koranpetek （わからない）よ。』

旭川（上川方面）と十勝の交流については、浅井亨氏は（「アイヌ語十勝方言」P340『十勝大百科事典』）「人々が、生き生きとしたアイヌ語を話していた時代から少し隔たり、話し手の情報が

十分に得られなくなった20世紀半ば過ぎの資料に依拠した話であるが、基本的な語彙を中心としてアイヌ語の方言を調べてみると、十勝の言葉は釧路、上川方面と共通する点が多く共に北海道北東方言を形成し、北海道南西部の方言群と対立するものとみなされる。語彙的には、日高地方の南東部ともかなりの共通点が認められるが、十勝方言は釧路地方と極めて近い関係と思われる。また語彙ばかりでなく、語句の構成や文の構造から上川地方の言葉とも共通する点が多い。日高地方との戦いの語り伝えや、特にウポポなどが上川地方のものと極めて似通っている点から考えて、日高地方よりは上川地方との人的交流が相当古い時代から緊密であったと考えられる。(略)」と述べている。

トメノフチは特に、旭川という地域や人々に対して普段から特別の思いを抱き、『旭川の人々に会った時に、言葉が同じだし歌も同じだった。あるときに杉村キナラブックさんと並んでウポポした時にはあまりに2人が同じウポポをするのでお互いにとても驚いたんだよ。』と楽しそうに旭川と十勝の共通性やその交流の歴史について話してくれました。

悪い神の降ろされた「あさひかわ」の話の後で『昔から、アサヒカワ は アヌヌカコタン である。ASAHIKAWA は a=nunuka kotan. アヌヌカコタンというのは、カムイコタンのことだよ。a=nunuka kotan とは kamuy kotan (旭川は、神様の国)』と言われます。現在も、カムイコタンというアイヌ語の地名が残っているということを申し上げると、『そりゃ、あるよ。』と特に驚かれた様子もなく、『この、あさひかわと十勝の歴史を忘れるんでないよ。』と何度も繰り返された。

その川は旭川付近の地図を調べても見つけることが出来ませんでした。小さい川だということと、名前が変ってしまって地図にものっていないのだろうかとも考えました。そこで、旭川在住の杉村京子さんにお話を伺う機会があったので、以前トメノフチがキナラブックさんに聞いた同じ質問を試みました。

「ツッポックシペッ cuppokkuspet っていう川、旭川にあるのですか?」

するとやはり、その答えは京子さんの母、キナラブックさんと同じ「ありますよ。」でした。

現在の地図では見つけにくくても、その川は地元の人には忘れられることなく、しっかりとアイヌ語の名前で伝わっているらしい。

京子さんは「今でも、(一般的に)その名前でよばれているかどうかわからないけれども、小さくてきれいな川だよ。」と、「その川には色々な伝説があったけれども、悪い川ではないんだよ、きれいな川で、ちっとも悪くないの。」と最後に優しく説明して下さった。

『このお話は旭川の人が聞いたら驚くだろうね。』というトメノフチの言葉をそのまま京子さんにお伝えすると、「それぞれのコタンにあるお話を大切にしないとね」と言われ、驚くどころか励まして下さった。

このお話は、実に長い時をかけて伝えられた。十勝の本別に伝わるあさひかわの昔話が、お話の舞台・旭川の杉村キナラブックさん、京子さん親子に様々な質問を試みながら、数人の偉大なフチの思い出と共に今日まで伝えられたのです。

本文全体、特に文法に関してご指導下さった北海学園大学の切替英雄氏、親切な助言を下さった旭川の杉村京子さんに特に感謝申し上げます。

註

ここに表す『　』の中は、語り手から説明された言葉そのままを書き記したものである。

(1)　タアン　コタン　タ　シノ　ヌプリ　ポロ　ヌプリ　アン　ワ　チョロポク　ペカ　モム　ワ　サン　ペッ　ツッポククシペッ　アリ　レアン　ペッ　アン　ル　ヘ　”taan　kotan ta sino nupuri poro nupuri an wa corpok peka　mom wa san pet cuppokkuspet ari rean pet an ru he?” という問いに対して杉村キナラブックさんは　アン、アン　マ　”an. an ma”〈an　wa と答えられたという。

(2)　この部分は、フチが『始めに少し練習してみるから』と言って語り始めた部分である。その後本文の語りに入ったのだが、話の一部として重要な部分なので了解を得て記載しました。

(3)　「十勝」を　トカプチ　”tokapci” と表現することもあるが、ここでは　トカチ　”tokaci” でした。

(4)　『タアン　アサヒカワ　アリ　レアン　コタン　アナク　テエタ　ネコン　レアン　コタン　ネ　アコランペテク　taan ASAHIKAWA ari rean kotan anak teeta nekon rean kotan ne a=koranpetek　（今の「あさひかわ」という村は、昔は何という村だったのかわからない）．アイヌ　レヘ　aynu rehe（アイヌ語の地名）あったかもしれないけれども　アイヌ　レヘ　aynu rehe 今はないの。「あさひかわ」というのは　シサム　sisam（和人）つけた　レヘ　rehe（名前）だ。アイヌ　レヘ　aynu rehe（アイヌ語の名前）誰にもわからないの。でも、知っている人いるかもしれないよ、中には。』との説明がありました。

(5)　「コルチ」　koruci とは、トメノフチの母親を指す。

(6)　『鷹栖町史』1973（pp28-29）によると旭川村（南東はチュプベツ川、北はウシシユベツ川を界として）が設けられたのは、明治23年である。

フチによると、『アサヒカワ　アリ　レアン　コタン　アナクネ　テエタ　ワノ　アスル　アシ　ヌプリ　エネネ　ヤッカイ　ASAHIKAWA ari rean kotan anakne teeta wano asuru as nupuri ene ne yakkay　険しい　ヌプリ　nupuri（山）ばっかりあるそうだ。（「旭川」という村は昔から山でも険しい山ばかりあるという噂がある。）　実際に見たことはないけれども。』

(7)　シリチャン　sir can というのは、『時代がやさしくなってしまった』ということであり、『みんなが（＝なんでも）やさしくなった』、『人間があまりにも規則を守れなくなった、守りきれなくなった』ということである。

本別方言の　シリチャン　sir can　は、幌別方言の　シリパン　sir pan　にあたり、知里幸惠は（『アイヌ神謡集』（pp86―93）　ポン　ホルケウカムイ　ヤイエユカラ　「ホテナオ」　Pon Horkeukamui yaieyukar, ”Hotenao”　「小狼の神が自ら歌った謡」の中で、タネ　アナクネ　シリパン　クス　”tane　anakne shirpan kusu”「今は時代が衰えたから」、タネ　シリパン　クス　”tane shirpan kusu”「今は世が衰えているので」と表している。

シリチャン　sir can の対語は、『カムイ　プリ　ユプケ　kamuy puri yupke 』であるという。

(8)　ここで使うアイヌ　aynu という語は、前後の文脈から判断すると「人間」という意味よりは、シサム　sisam　に対しての、あるいは集団・民族としての「アイヌ」が適切と思われる。

(9)　チャウエトク　cawetok は、ラマッコロ　ramatkor（りっぱな人、しっかりした人）であり、一般的にいわれる「雄弁」よりももっと広い意味で『頭も良く、雄弁でもあり、利口な人間で、度胸もある。物事を解決する際には、法律的にいつまでも静かに解決する人、全体的に優れている立派な人であり、少数である。』

『チャウェトク、チャウェトクウタラ cawetok, cawetok-utar とは アネオリパックル ネ an=eoripak kur ne. (チャウェトク、チャウェトクウタラ とは、尊敬される方、畏れ多い方である。)』

『ネプ イエ ヤッカイ カムイ ヌ ナンコロ nep iye yakkay kamuy nu nankor. (何を言っても神様は聞いてくださるであろう。) タアン クル イタキヒ ネ チカナクネ カムイ エネ ネ ヤッカイ ヌ ナンコロ taankur itakihi ne cik anakne kamuy ene ne yakkay nu nankor . (この人の言葉には神様でも耳を傾けるであろう。)』

それに対して、ラメトク rametok は『度胸がある人』であり、チャウェトク cawetok と同様、りっぱな方を意味する。『チャウェトク cawetok が物事を静かに平和的に解決する人であるのに対し、ラメトク rametokは、いつまでたっても物事が解決できない時に少しくらいは我慢しようと、その度胸をもって多少の反対を押し退けても解決するような人』を指す。

(10) 『神様、荒々しい山とかやさしい山とかいろいろつくるんだ。 カムイ コタン ヌカラ ワ パエカイ ワ kamuy kotan nukar wa payekay wa (神様は村を見て歩いて) そういうコタンこしらえるんだ。』

(11) 山田秀三氏によると、(「チュプカ・チュポクの地名」『アイヌ語地名の研究 1』) チュッポク・ツッポク cuppok は、日の下 (西) を指す方位名である。

フチが方角を示すのは、近くを流れる川を基準としているため、ツッポク cuppok を「日の沈む方向=西」として使用していないようです。

ツッポックシペッ cuppokkuspet と聞いて、頭に浮かぶのは、「悪い神が降ろされた川」であるという。川の性質については、しばらく考えてから『陽のあまり当たらない川という意味でないだろうか。その山は大きい山であるというし、木や草がうっそうと茂っていたんだから、それの影にでもなって川にあまり陽が当たらなかったのではないだろうか』という。

フチの説明によると、この川は、『ウェン カムイ アコランケ ヌプリ アン ワ ネプ ウェン カムイ エネ ネ ヤッカイ ワッカ イサム チカナクネ ソモ シクヌ ナンコロ クス ネアン ヌプリ チョロポク ペカ ポン ワッカ ラン ワ ネアン カムイ ワッカ ク クニ アリ ピリカ カムイ ウタラ wen kamuy a=koranke nupuri an wa nep wen kamuy ene ne yakkay wakka isam cik anakne somo siknu nankor kusu nean nupuri corpok peka pon wakka ran wa nean kamuy wakka ku kuni ari pirka kamuy utar (悪い神が降ろされた山がありまして、どんな悪い神でも水なしには生きられないだろうから、その山の下に水が流れていてその神が水を飲む場所を良い神様は) ちゃんと考えてやっているんだよ。』『昔々は悪い神をどこでもここでも置いたら管理が出来ないから、この ツッポックシペッ アリ レアン ヌプリ アナクネ ウェン カムイ アコランケ コタン ネ クス ヤイツパレ ヤナニ cuppokkuspet ari rean nupuri anakne wen kamuy a=koranke kotan ne kusu yaytupare yan ani (ツッポックシペッ という名前の山は、悪い神が降ろされた村であるから気を付けなさいよ) と言って伝承された。』

あくまでも昔々であって、今では良い川、良い村になっている。

(12) 川の名がそのまま山の名に使われている。『カムイ オロワノ ウェン カムイ アコランケ ヌプリ ネ kamuy oro wano wen kamuy a=koranke nupuri ne.』(この山は、神様が悪い神を降ろした山である。)『悪い神様だって落ち着く所がなかったら困るでしょう。 ウェンカムイ エネ ネ ヤッカイ オロタ オシッチュウ クン ヌプリ wen kamuy ene ne yakkay oro ta ositciw kun nupuri (そこは悪い神が 落ち着く山)』 という事で 降ろされたのが ウェンカムイ アコランケ ヌプリ wen kamuy a=koranke nupuri (悪い神が降ろされた山) である。

(13) 『人間だって悪い根性をもった人間もいれば、カムイ kamuy だって悪い根性をもった者もいるから、その ウェン ケウツム コロ カムイ アコランケ コタン wen kewtumu kor kamuy a=koranke

kotan （悪い心を持つ神が降ろされた村）っていうんだよ。』

さらに、『悪いからっていきなり オチシテ ociste（滅ぼす）する訳にはいかない。だから、アコランケ コタン アカラ アンベ a=koranke kotan a=kar an pe.（悪い神を降ろす村を作った。）そして、本当に ウェン カムイ wen kamuy （悪い神）だったら、アノチシテ an=ociste （滅ぼされる）するということ。』

(14) ene awki ne ya ＜ ene awki hi ne ya　北海学園大学・切替英雄氏よりご教示いただいた。

(15) カミ kami（肉）は 『ルス パテク rus patek ない、毛だけでない、皮のついた肉』 『がりっとかじったら皮だけでない、肉もふっついてくるべさ。』

(16) カミ リシパ ワ オスルパ kami rispa wa osurpa （肉をちぎって投げ）を カミ クパパ ワ リシパ ワ オスルパ kami kupapa wa rispa wa osurpa （肉をがりっとかじって、ちぎって投げ）と説明されたこともある。

(17) 何故、自分の肉を食べるのか? 少し長くなるが、本文の語り前に要約を話して下さった。そこには、『（中略）その ウェン カムイwen kamuy （悪い神）は、ここからどこへも行けないんだよと良い神様に言われて、悪い神様このでっかい山に降ろされている。でも、ウェンカムイ wen kamuy （悪い神）だからなかなか食べ物もあたらない。ニ ポロンノ ロシキ ni poronno roski（木がたくさん立ち並んで）して、ハップンカラ hat punkar （ぶどうづる）でも何でもあるんだけど足りない。ハイタ ワ イベ コウェン hayta wa ipe kowen （足りなくて食べ物も悪い）して、そこへ ネコン ネ nekon ne（どう）したか クッチャン ピリカ ワ ヌプリ エメス コロ ウポポ カン エメス ラン コロ ウポポ ソモキノ ネアン ウェンカムイ カミ エウマレ ワ エ kutcan pirka wa nupuri emesu kor upopo kan emesu ran kor upopo somo ki no nean wen kamuy kami eumare wa e （声が良くて山を登る時、歌をうたいながら山を登る、山を降りる時には歌はうたわないでその肉を集めては食べる）自分の肉噛んで投げながら上がる、食うものないから自分の肉を食っては自分を養っていく。そんなような、 ウェンカムイ、アノチシテ カムイ wen kamuy, an=ociste kamuy （悪い神、滅ぼされる神）いるわけよ。』

また『ネプ ウェンカムイ エネ ネ ヤッカイ コタン コロ クニ アリ ハワシ カン ウェン カムイ エネ ネ ヤッカイ コタン アコレ ワ オロタ ヤイレス クニ ネ ワ ネコン ウェンカムイ エネ ネ ヤッカイ ワッカ ク ルスイ アリ ハワシ カン ネアン ワッカ レ、ポンペッ レヘ アナク ツッポククシペッ アリ レ アコレ ワ ネアン ペッ オロパクノ パテク ネアン ウェンカムイ ラン アッカリ オノン エノンコ オマナン エアイカブ nep wen kamuy ene ne yakkay kotan kor kuni ari hawas kan wen kamuy ene ne yakkay kotan a=kore wa oro ta yayresu kuni ne wa nekon wen kamuy ene ne yakkay wakka ku rusuy ari hawas kan nean wakka re, pon pet rehe anak ”cuppokkuspet” ari re a=kore wa nean pet oro pakno patek nean wen kamuy ran akkari onon enonko omanan eaykap.（どんな悪い神であっても村を持つものであり、悪い神であっても村を与えられてそこに自ら落ち着いて、どんな悪い神であっても水を飲みたいので、その水の名、小さい川の名は”ツッポククシペッ”という名が付けられて、その川までは悪い神が降りることが出来るが、それ以上はどこへも行くことが出来ない）それ以上どこへも歩けないことに規則決められてしまった。だから、そこに居て、エブ カ イサム ウェンカムイ ネ ワ アンベ ウン アン クス エブ カ イサム コロカイ モナ アナク ポロンノ ムン ウサ ニ ウサ ポロンノ ロシキ クス ムニベ ニイベ エ コロカイ ハイタ ep ka isam wen kamuy ne wa an be un an kusu ep ka isam korkay mona anak poronno mun usa ni usa poronno roski kusu mun’ibe ni’ibe e korkay hayta.（食べる物もない悪い神であって、そうして食べるものもないけれども座ってたくさん草や木もたくさんあるので、草の実・木の実を食べるけれども足りな

い）足りない。（略）』

⑱ 下線を引いたこの4行は、始めは本文の中にはなかったが、語り終えて、『その川は ポン コロカイ ワッカ ク エアスカイ pon korkay wakka ku easkay（川は小さいけれども水を飲むことは出来る）』と改めて川の説明をした時にこのように付け加えられた。

⑲ すばらしく良い声を持つ悪い神は、歌をうたって人間を引き寄せては食べてしまうという悪い噂があるが、そのようなことはいつまでも続かないだろうと思っていたが、結果的には更に悪くなってしまった。

⑳ ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典』(1981)によると 「ishirikurantere, イシリクランテレ、まあ（嘆息ノ辞）. interj. Dear me! Oh dear!」

この中では "isirkuran"イシリクラン「驚いた、びっくりした、あきれた」と、強調された形 "issirkuran"イッシリクラン の2種類の記述がある。この言葉は日常会話においてもよく使われる。

㉑ 悪い神の仕業であるにもかかわらず、人間は神様の行いであると思い込んでいる。

㉒ 悪い神は、自分が降ろされた山の事は隅から隅までわかっているし、その上『フラハ アリ イヌ huraha ari inu する（匂いでわかる）』ので誰が来るのかわかるとの事。

㉓ 言い間違えの部分。ウェンカムイ（悪い神）は、自分の肉をちぎりながら、山を登るのだが、ここでは肉をちぎって投げながら降りると語っている。

㉔ ene an ihi ＝ ene awki hi 切替氏のご教示による。

㉕ この後に続いて思い出された部分が入るのだが、『（ウェンカムイ wen kamuy は）アイヌ エク aynu ek しているのを知って、もう1回 ウポポ upopo してやりましょうと思って、ウポポ カン カンナスイ エメス ネアン クル インカラ ワ upopo kan kanna suy emesu nean kur inkar wa だんだん アイヌ ウエカラパ aynu uekarpa する。（（悪い神は）人間がやって来るのを知って、もう1回歌をうたってやりましょと思って、歌をうたい、もう一度山を登る。その人が様子を見ていると他の人間も集まってくる。）』

『アイヌが近寄って来ても、（悪い神は）肉をちぎって投げているから、人間はおもしろいからなんぼでも見ているべさ。この人より、別の方から来ている人、カンナ オヤク ワ また エツク ワ エク クル kanna oyak wa etuk wa ek kur （また別の方からやって来る人）来るべ。 インキアンペ inki anpe か エ e（どの人か食べる）する気になっている。シネン sinen （1人）だけでない、どっちを食べたらいいかなと思って ウポポ upopo （歌をうたい）しながら登っている。イキア クル アエ ikia kur a=e（その近づき過ぎた人食べられる）される。あまり近く寄りすぎたので、それを ウェンカムイ wen kamuy （悪い神）は見込んでいる。』

㉖ オタスッウンクル は、「あさひかわ」からは離れたコタン（村）に住んでいるので遠くから噂が聞こえてきた。

㉗ ここでの カメアシケ kameaske という語は、ウェンカムイ（悪い神）を指している。

カメアシケ kameaske という言葉は、それ自体「化物」という意味ではないが、何かが「化けたもの」を指すこともあり、大きくて（位などが）重いものに対して使う。他に、カメアシ kameasi という語もあり、虫・カエルなどの小動物を指す。

カメアシ kameasi カメアシケ kameaske の意味としては、「ろくでもないもの」「畜生」「こいつ」などの意味である。ツイタク tuytak, サコルペ sakorpe や ユカル yukar などに使われる単語であるが、怒ったり、腹がたった瞬間などに悪口としてとっさに親から子供に対して使われることもあったという。

タアン カメアシケ サウレ ル アン "taan kameaske sawre ru an" 、タアン カメアシ サウレ ル

アン ピリカノ モンライケ アニ ”taan kameasi sawre ru an、pirkano monrayke ani” 「お前、なまけているね、きちんと仕事をしなさい。」しかし、子から親へ、女性から男性へは決して使われることはない。

(28) トメノフチの表現では、語頭の h が落ちることがあり、
awki < hawki もその1つである。
aynu ronno aw an a 〈 aynu ronno haw an ya
aynu ronno haw an a 〈 aynu ronno haw an ya
aynu e aw an a 〈 aynu ronno haw an ya
以上のようにこの3行の中に aw と haw どちらの表現も使われている。

(29) 人間達は様子を見るために近づいて、悪い神に食べられた者もいるが、オタスッウンクル は ラマッコロクル ramatkorkur（利口者、しっかり者）なので、見つからないように慎重に行動している様子が表されている。フチが言うには『人間にけがのないように、色々と考えなかったらならない。利口な人は考えに考えてやるんだよ。ダメな人はすぐにやるけれどもね、すぐやったらいけないことあるのよ、いっぱい。』

(30)オチシテ ociste『すっかり台無しにしてしまう』『浮ばない、浮ばせない』『滅ぼす』『アノチシテ ワ ソモ アノミ an=ociste wa somo a=nomi だいなしにしてしまったら祈りもしない』、『エイコシテク アイヌ ロンノ コタン ウェンテ クス アノチシテ eykostek aynu ronno kotan wente kusu an=ociste.（あまりにも人間を殺して、村も荒らしたので滅ぼされてしまった。）』

『良い カムイ kamuy（神様）は、イナウをもらったり、ごちそうももらったりしてちゃんと自分の国へ持って行くけれども、この悪い神にはイナウ何もあげないで ノミ nomi（祈り）も絶対にしない。オウセ ポネ オウセ レタルポネ ネ テク（カムイ オロワノ）アノチシテ クス シネ イナウ エネネ ヤッカイ ソモ アコレ o’use pone, o’use retar pone ne tek （kamuy oro wano）an=ociste kusu sine inaw ene ne yakkay somo a=kore.（ただの骨、ただの白い骨になって神様から滅ぼされてしまったので1本のイナウももらえない）ということ。』

(31) 昔々は、たとえどんな ウェンカムイ wen kamuy（悪い神）をオチシテするのであっても、そう簡単にしかも短期間で滅ぼしてしまうような事はしないで、じっくりと様子を見ていた。しかし人間を殺してしまった以上は オチシテ ociste（すっかり滅ぼす）してしまう。

(32) 本文では、コイキ テク ネアン ウェン カムイ ロンノ ル ネ ”koyki tek nean wen kamuy ronno ru ne.” という語りであるが、その後、コイキ koyki（いじめる、など）だけでは物足りないし、カムイ（神）に対しては、 ロンノ ronno という言葉は使わないというフチからの解説があり、この部分はつぎの8行に言い換えられた。

(33) この8行の挿入により、具体的な オチシテ ociste の方法が加えられている。この部分はさらなる詳細な表現が期待できそうです。

ここで悪い神は滅ぼされてしまうのだが他にもいくつかの似たような悪い神、化物の例もあり、『キナラブック 口伝 アイヌ民話集1』（1990　p191）には、

「キナ婆、チチケウナってどんなもんだ?」

「オレ見たことないよ、何でも毛のない熊みたいなもんだとヨ。昔話に ”沖の化物六つ、陸にいる化物六つ”（トウイタク レプンウエンカミヤシイワン キムマオカイウエンカミヤシイワン）を合わせた恐ろしい化けものだって言っているよ」とキナラブックさんによる説明がある。

また、吉田巌は（「アイヌの妖怪説話」『人類学雑誌』第29巻第19号、大正3年10月20日）沙流の山奥ヌプキペツでのチチケウニツネヒは、耳と尾に少し毛のある化け物であるが、それは「幻覚を見て

錯覚した」として、ある説話を紹介している。

『昭和61年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査VI)』(2-1-4．クマの種類）十勝・伏古の山川弘氏によると、

チチケゥニ cicikewni.「父から聞いた話だが、父が芽室から広尾の方へ行ったとき、小さいけれど、ろくでもないクマに出会った。杖（クワ kuwa）を振り回してようやく撃退したことがある。このようなクマをチチケゥニと言うそうだ。」などの記述がある。

ところで、語り終えてからフチが解説してくれたウェン カムイ （悪い神）の正体というのは、『パケヘタ ヌマテコロ アシ サラ エエパキケ タ ヌマテコロ アシ pakehe ta numa tekor as sara eepakike ta numa tekor as （頭のてっぺんとしっぽの先には毛がある）あとは、トントネ tontone （無毛)である。』という。始めに『パケヘタ ヌマテコロアシ イシニチヒタ ヌマテコロアシ pakehe ta numa tekor as isinitihi ta numa tekor as』と述べられたが、しっぽについては言い違えたということで改めた。

サラハ sar,-a,-ha とは、比較的長い （タンネ tanne）しっぽ。チロンヌプ サラ cironnup sara キツネのしっぽ、エルムン サラ erumun sara ネズミのしっぽ、 シタ サラ sita sara 犬のしっぽ、カセクルクル kasekurkur シマリス（シマネズミ） ニウエオ niuweo リス（キネズミ）のしっぽなどを指し、別の「しっぽ」を表す言葉 イシニチヒ isinit,-i,-hi は短かい（タクネ takne）熊のしっぽ カムイ イシニチ kamuy isiniti や、兎などのしっぽを指す。

この悪い神は、キナラブックさんの「みたこともないチチケウナ」や吉田巌氏の「幻覚を見て錯覚したチチケウニツネヒ」は、「熊のようなもの」「毛が少ない」などの点では似ていると言えるのではないでしょうか。しかし、山川氏の「ろくでもないクマ」に実際、山で出会ったという事実も見過ごすことができないものです。

そして、悪い神は現代で例えるならば、その大きさ、行動や外見から「ライオン」のようなものであると説明された。『テレビで見てたら今のライオンみたいだもん。』『だけど昔、ライオンが北海道に来たのだろうか? 来たとしたら、どこから、どうやって来たのだろうか?』とフチは不思議に思っています。 しかし、このお話の中の ウェンカムイ wen kamuy（悪い神）は、もう オチシテ ociste（滅ぼされ） されてしまったので、今はもう誰にもその正体は分らなくなってしまった。

このウェン カムイ wen kamuy 悪い神の正体の説明の部分も元々は本文に含まれていたものであろうか。その中で、その先っぽだけに毛があるというしっぽをふりふり、ウポポ（歌）をうたっていたのかもしれない。それは愉快な光景であったに違いない。

(34) ここからは、語り手が代り otasut’unkur が語っている。

(35) しかし、実際のところはフチの説明によれば『オタスッウンクル アン マヌクス タアン コタン アスルアシ コタン ネ otasut’unkur an manu kusu taan kotan asur as kotan ne. （オタスッウンクルが居てくださったおかげでこの村は名高い村になったのです)』

(36) この部分は始めに、『っていう ウチャシコマ ucaskoma』。二度目には『アリ オタスッウンクル アウキ ari otasut’unkur awki.』とも語られ、『最終的には、オタスッウンクルが行った事だから、アリ オタスッウンクル ヤエユカラ アワン ari otasut’unkur yayeyukar aw an.』との説明があった。

参考文献

•浅井亨 1985 「カンナカムイの話」『アイヌの民話２』財団法人アイヌ無形文化財伝承保存会PP193―243

・旭川市史編集委員会（編）　1959　『旭川市史』第3巻
・旭川市史編集委員会（編）　1960　『旭川市史』第4巻
・切替英雄 1989 『アイヌ神謡集』辞典 北海道大学文学部言語学研究室
・KIRIKAE Hideo 1993, “Some Geograhpical Concepts of the Ainu”, 『環極北文化の比較研究（文部省科学研究費補助金報告書）』pp103—120
・久保寺逸彦（編）　1992 『平成3年度久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語事典稿）』北海道教育委員会
・ジョン・バチラー 1938　『アイヌ・英・和辞典 第四版』岩波書店
・鷹栖町 1973 『鷹栖町史』
・知里幸惠 1923『アイヌ神謡集』郷土研究社（引用ページ番号は岩波文庫版による，1978）
・中川裕（校訂）大塚一美（編訳）1990『キナラブックロ伝 アイヌ民話全集 1神話編 1』北海道出版企画センター
・服部四郎（編）　1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店
・本別教育委員会（編）　1989 『沢井トメノ 十勝本別アイヌ語分類辞典』
・山田秀三 1982 『アイヌ語地名の研究 第1巻』草風館 pp276—323
・山田秀三 1986 『アイヌ語地名を歩く』 北海道新聞社
・由良勇 1990『カムイコタンからチュプペツまで アイヌ語地名と伝説の岩』
・北海道教育庁社会教育部文化課（編）　1987(昭和62)『昭和61年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査VI)』北海道教育委員会 p8
・『十勝大百科』 1993 北海道新聞社
・目黒治助・内田祐一 1993 「十勝の文化誌 沢井トメノ媼が伝承する本別のアイヌ文化 1 - 動物の名称とその伝承-」『アイヌ文化』 第18号 p18-39 アイヌ無形文化伝承保存会
・吉田巌 1914 「アイヌの妖怪説話」『人類学雑誌』第29巻第10号 pp398-399